

8020達成型県民社会における高齢者像

ー埼玉県 8020 よい歯のコンクール(2003年～2011年9年間 1,914名)データ分析からー

埼玉県歯科医師会地域保健部

本調査の背景

2012年から2014年にかけて、団塊世代が65歳以上に達することで、2015年には県民の4人に1人が高齢者になるという超高齢社会が到来する。そして、本県は今後日本一のスピードで高齢化が進行すると推測されている。厚生労働省の報告(2012年9月)によれば、わが国の100歳以上の高齢者の数は51,376名であり、100歳の高齢者の歯科治療を行うことも現実的なものとなってきた。そして、20年後には、歯科患者の半数は65歳以上の高齢者になるという予測も報告されている。

歯の保存状態の改善は、全身の健康状態の向上と寿命の延伸に寄与する。しかしその一方、現状をみると、80歳で20歯以上有する者の割合は38.3%、一人平均歯数は13.9本であり(厚生労働省歯科疾患実態調査2011年)、80歳の半数以上が20歯以上の歯を有し、多くの県民が生涯にわたって口腔機能を維持している「8020達成型社会」の実現にはいたっていない。

そこで、本会では「8020達成型県民社会」の実現に向けてこの3年間、健康格差の是正、生涯にわたる口腔機能の維持・回復、歯の喪失防止の観点から地域保健事業を展開してきた。

※「8020達成型県民社会」とは、80歳の約半数の人が20歯以上の歯を有し、残り半数の人は20歯未満であっても、歯科医療によって咀嚼をはじめとする口腔機能が回復され、全ての県民が生涯、食べる、話す、笑うといった口腔機能が維持されている社会。そして、個人や地域が、口腔保健を通して健康を創り出す力を持っている社会のこと。

目的

8020達成者の口腔内状態および日常生活習慣等の分析を通して、本県における「8020達成型県民社会」における高齢者像を示すことを目的とする。

対象および方法

対象者は、2003年～2011年の9年間における本県の8020達成者1,914名で、内訳は、男性1,007名、女性907名である。年齢階層別では、79歳32名、80歳～84歳1,655名、85～89歳188名および90歳以上39名である(表1)。

表1 埼玉県「8020よい歯のコンクール」対象者

年齢	男性	女性	合計
79歳	16	16	32
80-84歳	878	777	1,655
85-89歳	98	90	188
90歳以上	15	24	39
合計	1,007	907	1,914

埼玉県「8020よい歯のコンクール」の際に使用している健康診査票・質問票について分析した。健康診査項目は、身体状態および口腔内状態である。身体状態の分析項目は、身長；体重；BMI値および握力について、口腔内状態については、残存歯数；未処置歯数；処置歯数である。質問項目は、咀嚼能力；生活習慣および口腔保健行動について分析した。

結果および考察

本調査では、埼玉県「8020よい歯のコンクール」の際に使用している健康診査票・質問票をもとに分析した。身体状態は、身長；体重；BMI値および握力について分析した。身長・体重は、男女とも平成22年度厚生労働省国民健康・栄養調査結果と比較して少し上回る数値であった。握力は年齢合計・左右平均で男性29.7kg、女性17.6kgとなり全国平均とほぼ同様の数値であった。BMI値は、79歳，80－84歳，85－89歳および90歳以上のすべての年齢階層において、22～24の間の数値であり、やせすぎの基準値である18.5と肥満の基準値である25の中間値付近で理想的な数値であった(図1)。よく噛んで食べることができる口腔内状態は、肥満・低栄養の防止につながっていると考えられる。

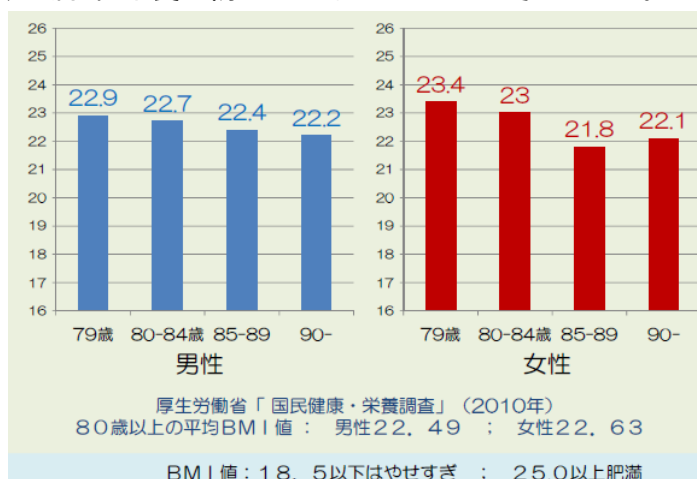


図1 身体状態：BMI値

口腔内状態については、本県8020達成者の現在歯数を、男女別・年齢階層別に示すと、男性では、80－84歳で26本、85－89歳で25.1本、90歳以上で23.5本であり、女性では、80－84歳で25.7本、85－89歳で24.9本、90歳以上で23.3本であった(図2)。いずれの年齢階層においても、男性が女性より0.2～0.3本多く残存していた。

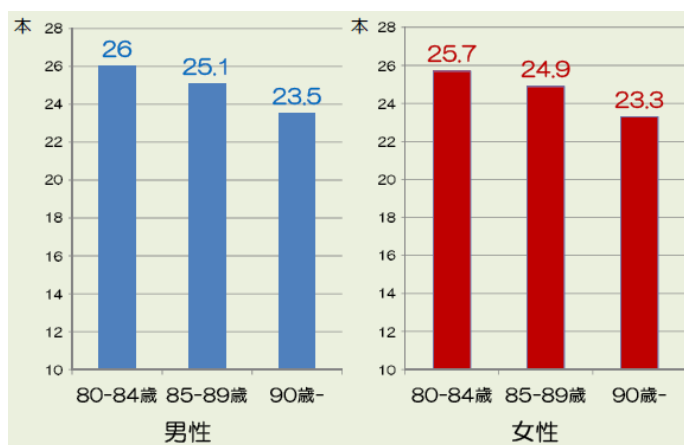


図2 口腔内状態：一人平均現在歯数

年齢階層別・男女合計の残存歯数、未処置歯数、および処置歯数について分析した。残存歯数は、80～84歳で25.9本、処置歯数は13.1本であり、半数が何らかの処置を受けていることがわかった(表2)。なお、今回の報告では詳細な処置内容についての分析は行っていない。

表2 現在歯の状況(男女合計)

	残存歯数	未処置歯数	処置歯数
79歳	26.1	0.4	12.2
80-84歳	25.9	0.4	13.1
85-89歳	25.0	0.7	13.7
90歳以上	23.4	0.8	13.2

男女合計・年齢合計の歯種別残存歯率は、いずれの歯種においても左右差は少なく、下顎犬歯が最も残存率が高く、続いて下顎側切歯・上顎犬歯の順であった。下顎第一大臼歯は、最も残存率が低く71～73%であった。上顎前歯部においては残存率が高く、92～94%であった(図3)。

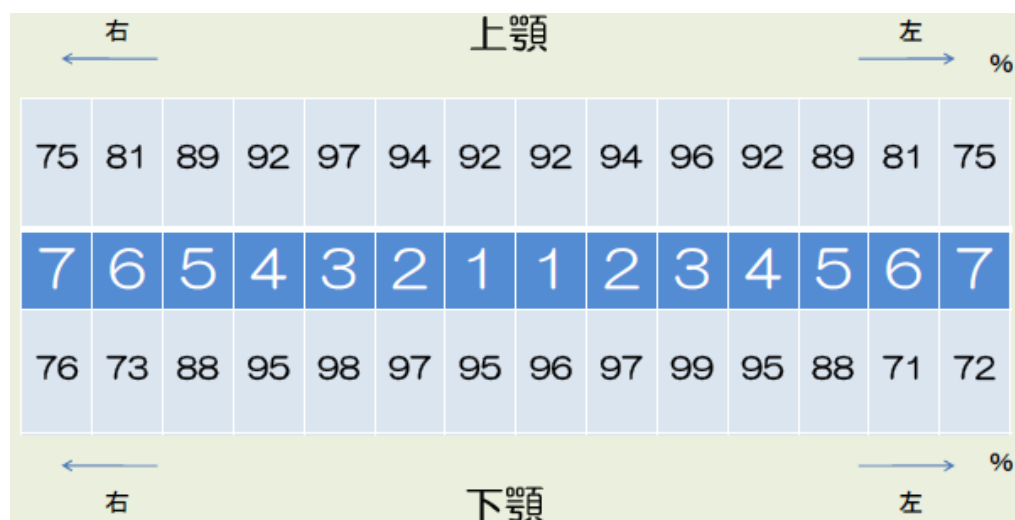


図3 歯種別の残存率(男女合計・年齢合計)

質問票については、咀嚼能力・生活習慣・口腔保健行動について分析した。咀嚼能力については、山本式総義歯咀嚼能率判定表(簡易版)を用いて評価した。本県8020達成者で、何でも食べられると回答した者の割合は81.5%で、その内訳は、男性83.5%・女79.3%であった。この数値を1997～98年度厚生科学研究「高齢者の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究」の一環として岩手、福岡、愛知の3県(23市区町村)での80歳を対象に実施された悉皆調査結果(1,962名)の男性29%・女性20%に対して、県内の8020達成者は平均的な80歳高齢者と比較して、男性で約3倍、女性で約4倍であった(図4)。なお、15品目のなかでは、ごはんが95.0%と最も高く、貝柱の干物が81.5%で最も低かった(図5)。

何でも食べられる者の割合：山本式総義歯咀嚼能率判定表の15品目
すべて食べられると回答した割合

	男性	女性
本県の 8020達成者	83.5%	79.3%
※80歳	29%	20%

※1997～98年度厚生科学研究「高齢者の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究」
岩手、福岡、愛知の3県（23市区町村）での80歳を対象に実施された悉皆調査（1,962名）

以下の食品について噛むことができないものがあつたら、該当する食品の番号に○をつけてください。
(○はいくつでも)

1. ピーナッツ 2. たくあん 3. 堅焼き煎餅 4. フランスパン 5. ビフテキ
6. 酢だこ 7. らっきょう 8. 貝柱の干物 9. するめ 10. イカの刺身
11. こんにやく 12. ちくわ 13. ごはん 14. まぐろの刺身 15. うなぎの蒲焼き

図4 咀嚼能力(年齢合計)

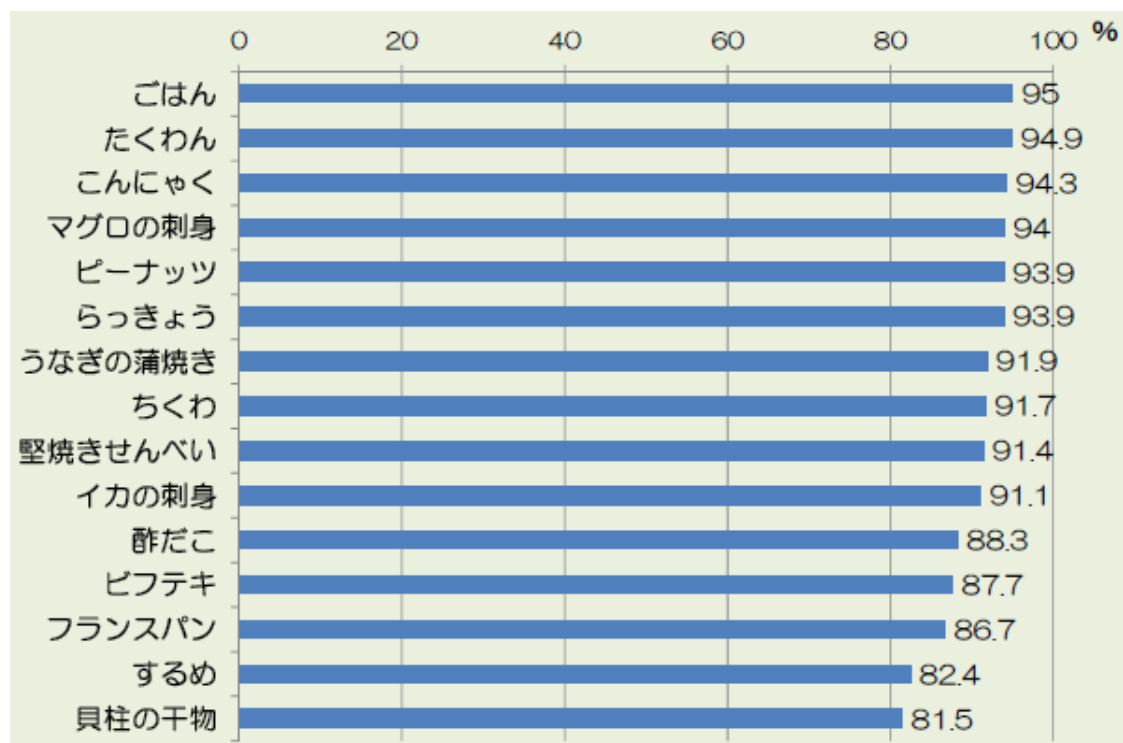


図5 咀嚼能力(男女合計・年齢合計) 食べられる食品(15品目)

生活習慣については、「毎日朝食を取る」98.7%、「今の生活に満足」96.4%、「趣味あり」84.8%、「定期的に運動する」者の割合が72%であった(図6)。

口腔保健行動については、「歯・口腔の衛生に気をつけている」者が88.7%、「歯みがきを1日2回以上」71.5%、「歯間ブラシを使用」54.4%、「定期的に歯科受診」40.5%であった(図7)。

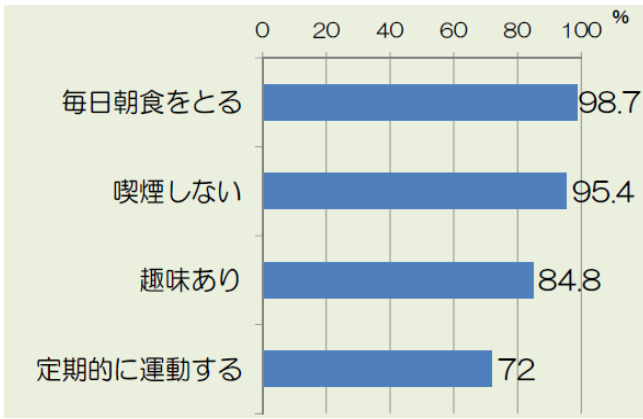


図6 生活習慣(男女合計・年齢合計)

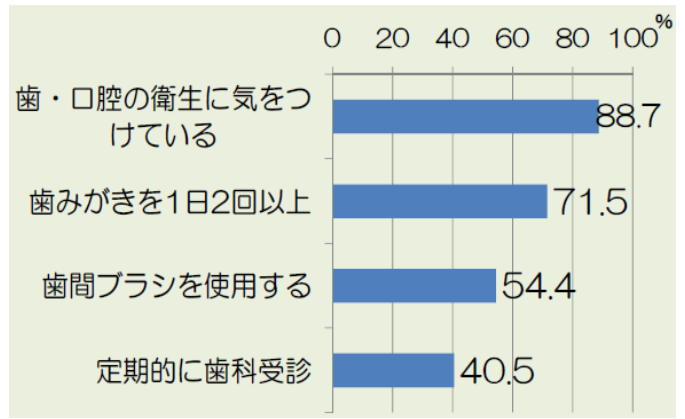


図7 口腔保健行動(男女合計・年齢合計)

フェイススケールは、調査時点の生活満足度を表す指標として郡市歯科医師会開催審査日当日の8020達成者自身の顔の表情を評価したものである。本県8020達成者については、「フェイススケール1」40.2%で、「フェイススケール6」37.5%、「フェイススケール10」19.3%であった。また、1997～98年度厚生科学研究「高齢者の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究」対象者の結果は、「フェイススケール1」22%で、「フェイススケール6」34%、「フェイススケール10」36%で、本県8020達成者のほうが、「フェイススケール1」で約2倍の数値を示した(図8)。このことから、本県8020達成者は生活満足度が高いことが推測された。

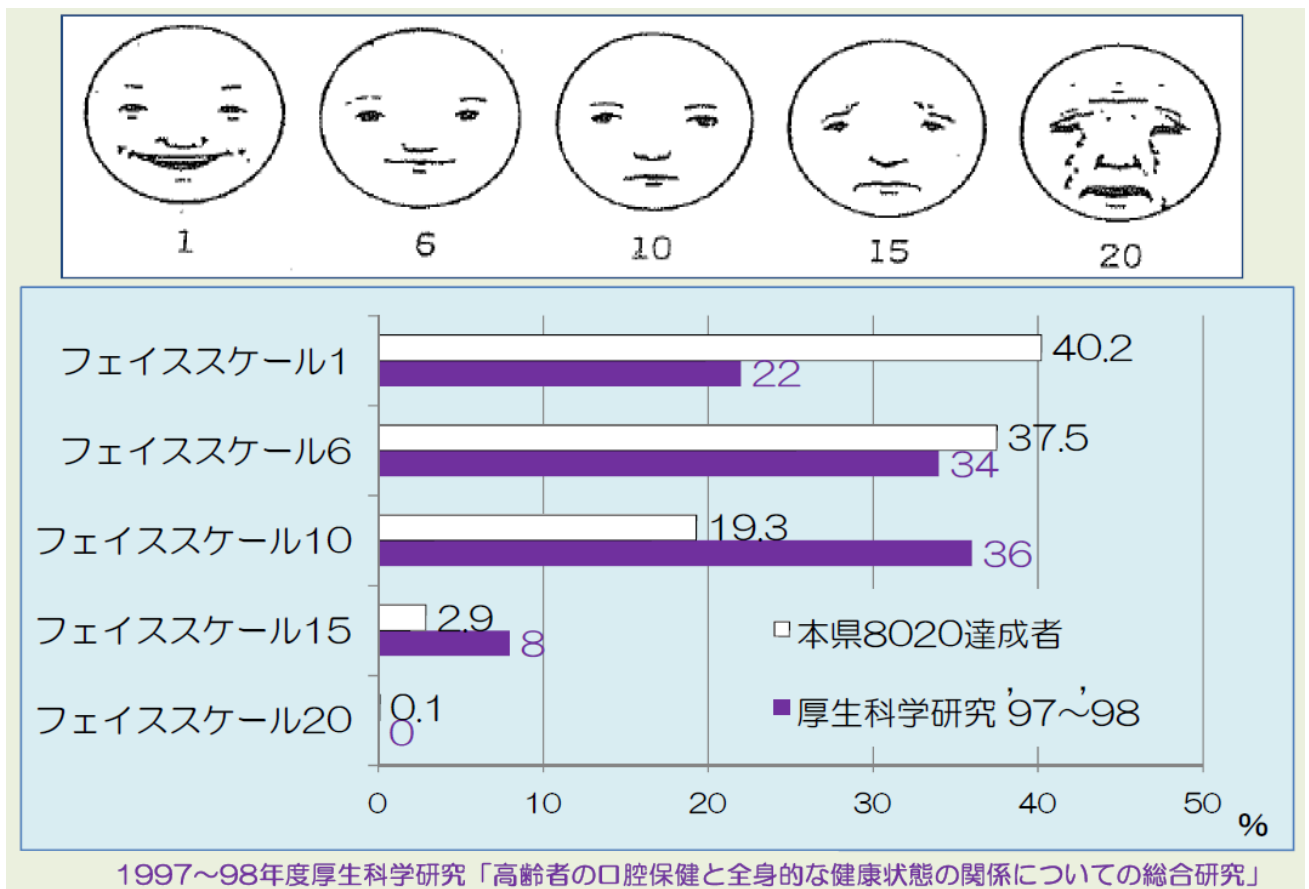


図8 フェイススケールを用いた生活満足度(男女合計・年齢合計)

以上、本県8020達成者の分析を行った結果、8020達成者は、良好な口腔健康状態・全身健康状態を維持し、食べる・話す・笑うといった口腔機能が維持されることが確認された。

結論

本調査結果からみると、「8020達成型県民社会」が達成された場合、本県における高齢者像は下記のような姿になると推測される。

1. 良好な口腔健康状態を維持
2. 良好な全身健康状態を維持
3. 食べる、話す、笑うといった口腔機能を維持
4. 日常生活に満足した暮らし

(2013 年年 3 月 3 日埼玉県歯科医学大会口演発表を基に作成)